

スクールカウンセラー(SC)の臨床活動に関する質的研究

ー 学校という“場”における経験の語りから ー

松 元 杏 子

問題・目的

学校現場にスクールカウンセラー(以下SC)制度が導入されて20年が過ぎた。学校臨床に関する研究の動向について、SC事業の動きに沿って、3つの時期に区分してみていく。

(1) 1995年～2000年：-SC事業開始- いじめによる痛ましい事件が発端となって「SC活用調査研究委託事業」が開始した。臨床心理の専門家が全国に配置され、SCの活用のあり方について実践研究が実施された(文科省,2007)。この時期は、SCの活動への評価やSCの役割、SCに対する意識、そしてSCへのニーズに関する研究が行われているといえる(伊藤(1994)；伊藤・中村(1998)；石隈他(1998))。

(2) 2001年～2007年-SC活用事業補助開始- 「SC活用事業補助」は、SCの配置を補助事業として1/2国庫負担で実施した事業である。この時期、SCの配置が進められ、2000年度までよりもSC事業が拡大してきており、地域や連携というキーワードを題目に挙げている研究がなされるようになった。地域との関わりや連携の必要性が認められるようになったことがうかがえる(例えば、栗原(2005)；中野(2006))。

(3) 2008年以降 2008年度より「SSW活用事業」が開始された(文科省,2008)。また、この時期は、学校教育法が2007年に改正され、特別支援教育が開始したことも注目すべきであるといえる。2008年以降、学校とSCだけでなく、学校と関係機関(医療や警察など)との連携に関する研究も行われるようになっている(例えば、麻生他(2012)；千原(2010)；石崎他(2013))。

3つの時期を通して、常に学校とSC、関係機関とのよりよい連携の在り方の検討は行われていたが、具体的な連携のあり方や個々のSCの活動における実際の連携のプロセスの検討、SCの経験に焦点を当てた研究はみられなかった。

また、学校について、「文化」と「場」に視点を

あてて考えた。耳塚(1993)は、学校には、学校という組織、制度が普遍的にもつ性格と各学校の歴史や社会的文脈の中でつくられる学校文化があると述べている。高橋(2014)は、子どもたちにとっての学校は、知識、技能を学ぶ場所であるという以前に、まず仲間とともに遊びや学び、つまり生活を共にするコミュニティであり、そこは他者とのやりとりによって独特の意味や雰囲気が発生する磁場であると述べている。中村(1989)によると、「場」には歴史を背景にそれぞれの場所が持っている様相とそれぞれの土地が持っている固有の雰囲気とがあり、それらは意味の濃密な空間を作り出している。中村(1989)は、「場」は均質的でなく、方向性を持っており、意味のネットワークからなっていると述べている。このことから、学校は組織や文化、人間関係を含む独特な“場”があり、それらは独特の意味を作り出しているといえる。これらのことから、SCに対する評価やニーズを明らかにしていくことだけでなく、学校という“場”におけるSCの経験を丁寧に分析していく質的な研究が求められるといえる。

そこで、本研究では、学校という“場”で働くSCの経験とはどのようなものなのか、またその経験をどう意味づけているのかを質的研究方法によって検討し、SCに対する理解を深めることを目的とする。

方法

研究方法 SC(経験年数5年程度)を研究協力者とする半構造化面接。

調査期間 平成27年5月～8月

研究協力者 経験年数5年程度のSC3名

Aさん：30代男性、SC歴6年(臨床歴10年)

Bさん：40代女性、SC歴7年(臨床歴12～13年)

Cさん：30代女性、SC歴6年(臨床歴7年)

手続き 研究協力を依頼し、日程の調整を行った。研究の趣旨や倫理的配慮について記載した

『研究協力依頼書』をインタビュー前に紙面を用いて説明し、理解と了解を得た後に署名して頂いた。面接では、情報として、勤務年数や勤務場所、勤務形態、臨床歴、SC以外での経験臨床領域、教職経験の有無もお聞きした。また面接の内容は、研究協力者の同意のもと、ICレコーダーに録音した。

質問項目 SCとして学校現場で働き始めた頃の経験、SCとして働くことに対するイメージや意義、学校現場で働く中で印象に残っている出来事や困難さを感じた出来事、学校現場の中でのSCと教員との関係性、学校臨床の特徴や他の臨床領域との違いなどについてお聞きした。SCが学校という“場”において、何を感じながらどのような経験をしているのかということ意識してお聞きした。

分析方法 学校という“場”で働くSCの経験を、個々の経験の記述とそこから見えてくるテーマの抽出を目指すため、現象学的アプローチを採用した。現象学的アプローチとは、「個人の経験の主観的世界(意識に現れた世界)について、先入観を置かず、当事者の主観に寄り添って記述し、その内容の背景にある文脈を考慮しつつ、その意味を取り出すこと(山竹,2010)」,「人間の経験の中に隠された構造と意味を明確にすること(キーン,1989)」を目的としている。

結果・考察

語りについて、各々の経験の特徴や共通点、相違点の抽出などといった検討を重ねる中で、現れてきたテーマに沿って考察した。

1. 学校という“場”の捉え方—経験のベクトルについて 研究協力者であるSCは、学校という独特な“場”において、その独特な“文化”や“雰囲気”、“組織”、“社会”、“風土”等に対して、“力み”や“抵抗”、“戸惑い”を感じていた。研究協力者にとって、学校という“場”において、独自性の強い“文化”や“雰囲気”等に対してベクトルが向けられていたが、その経験のベクトルの方向性や強弱の変化は個別的であり、一人ひとりの特徴的な仕方で“場”が構造化されていたと言える。

2. 学校という“場”での存在—SCとしての位置— 学校という“空間”において、その空間に魅力を感じさせる引力が働き、“空間”に引き込まれていったと考えられる経験がある一方で、

“閉鎖的な空間”であると再認識するという経験もあった。研究協力者は、このような“空間”に溶け込み、存在する意味を模索しながらも、存在のあり方やその空間における居場所を獲得していく経験をしたと言える。

3. 語りの中に存在している連携 全ての語りにおいて、“連携”を思い浮かべながら語られていることや語りのあちこちで“連携”について語っていることが窺えた。研究協力者は、“コミュニケーション”自体を“連携”と捉えており、“連携”は日常的に行われるもので、経験の中に浸透しているものでもあった。学校という“場”における経験において、“連携”が遍在していることが示唆された。

4. “場”の経験を通しての“自分らしさ”の追求—SCとして学校という“場”に入っていくことの意味— 学校という“場”において、その独自の閉鎖的なものに対する“抵抗”や“戸惑い”、“孤独”を感じながら、またそれらに対する意識も強い一方で、そのような“場”の中でSCとしてどうやっていくか考えること、想定しながら“場”に入っていくことに“やりがい”や“面白み”を感じていた。学校という“場”での経験を通して、現在から過去を意味づけたり、未来を予期したりしながら、“自己”を認識していることが明らかになったと言える。つまり、学校という“場”の経験は、“自分らしさ”の追求となる経験でもあるのではないかと考えられる。

臨床心理学的な意義

本研究では、現象学的アプローチを用いて、語りを丁寧に分析していくことによって、4つのテーマやそのテーマと共に広がる地平や普遍性が浮かび上がってきた。このテーマや地平、普遍性によって、研究協力者がどのような世界に存在しているのか理解することができ、“ベクトル”や“空間”という視点を手がかりにすることで、研究協力者の世界や経験の意味を捉えることができたと言える。本研究で浮かび上がってきたテーマは、SCだけではなく、心理職に対する理解を深めるための一助になるのではないかと考える。また、SCの存在する世界に対する理解は、よりよい“連携”や“協働”の検討を行う際の一助になるのではないかと考えられる。